

令和4年3月4日

「この人に聞く」成熟社会と建築

見城 美枝子 氏



プロフィール 1946年群馬県生まれ。青森大学名誉教授、ジャーナリスト。早稲田大学教育学部英語英文科卒業後、東京放送（TBS）

アナウンサーを経て、フリーに。海外取材を含め、56カ国を訪問。早稲田大学大学院理工学研究科博士課程単位取得。1996年青森大学社会学部教授、2015年からは同大学副学長も務め、2021年退職後現職。学外活動も多岐にわたり、全国農業会議所学識経験会員、ぐんま 街・人・建築大賞審査員長、（一社）農林水産業みらい基金理事、（一社）ゆうちょ財団理事、（株）テレビ朝日ホールディング社外取締役、（一社）公共建築協会公共建築賞審査委員などを務める。『見城美枝子の本音で！ リフォーム奮闘記』（ニューハウス出版）、『会話が上手になりたいあなたへ』（リヨン社）、『ニッポンの食と農この10年』（全国農業会議所）など著書多数。

（前文）

環境、教育、農業など様々な分野で活躍される見城美枝子氏に、建築をテーマに様々なお話を伺った。

## ■ 建築への関心と人生の再生

私自身のおぼろげな記憶と母から聞いた話ですが、子供の頃にノートなどに家の間取り、図面のようなものをよく描いていたようです。また地元の館林城跡で友だちと遊んでいても、大広間や廊下など思い浮かべて舞台演出して遊んでいました。きっと住空間に惹かれていたのだと思います。しかし、当時女性が学校や仕事で建築を選ぶというのは一般的ではなかったですし、私もすっかり忘れてしまって、アナウンサーの道に進みました。そして、キャリアを積んで45歳になった時、ここで「再生だな」と考えました。アナウンサーの仕事は年齢に左右されやすいし、高齢になったから安泰というものでも

ない。社会的に仕事を続けていくために、ここで勉強し直そうと決心しました。

私は長い海外取材から、自分の思考、動作が日本的であることを強く意識していました。そこで、「日本人はどうして日本的なのか」をテーマに据え、大学での研究をどう進めるか考えているうちに、「住空間」が浮かんできました。人は生まれてずっと住空間の中にいる。この住空間が日本人らしさの土台をつくってきたのではないか。そして建築で、古建築の住空間を学びたいとつながったんです。

そして、住空間の最も日本的なところは、外界に対して建物の内側という結界をつくり、それを越えて中に入る行為における儀式性にあると考えて、日本固有の「上がり框」を研究することにしました。ここで履物を脱いで家に入る、精神的にも別の空間に入っていく。それにより礼儀が育まれ、形式ができる、こうしたことが「日本人らしさ」の形成に大きく影響している。やはり日本人は日本的なものを建築を通してつくってきたのだと考えました。

こうした研究を起点に建築に係わるが増えていき、好奇心から、それが様々な分野に興味を広がっていき、今でも建築に大変興味を持っています。

## ■歴史的建物保存とコミュニケーション

かつて日本では、解体した家の部材を材料にして、家を建て直していました。それが、あるときから建築に限らず古いものは壊して捨てて、また新しくつくればいいという考え方が横行してきました。メンテナンスの文化があったのに、それが全く伝わらない、伝えない、学ばない、学べない社会では、なぜ古いものに価値があるのか分からない。どうしたらこの建築が持つ価値・意義を伝えられるか、これにはコミュニケーションが鍵になってきます。

古い建築の改修事業では、古いから壊して新しくしたい方とその良さを知っていて残したい方がいて、そこに、コスト、機能性、安全性などで様々な意見が交錯するという状況が見られます。こうした場合、きちんと改修すればさらに100年もつとか、今や当然のような言葉になったSDGs、当時ならリサイクル、このリサイクルが利くとどれだけ経済的効果があるかといったことをインフォメーションすることが必要です。そして重要なのが、建築的価値を知っていて残したい人たちと、価値を知らずに建て替えたい人たちとの意見の違

いを、インテリジェンスの格差に置き換えず、対立関係をつくらないことです。双方の目線の高さを合わせて、価値ある建築を未来に継承しようというインフォメーション、話し合いによって、コミュニケーションがうまく取れていくのです。

戦後モダニズム建築の象徴である前川建築京都会館（現ロームシアター京都）の保存再生事業でリノベーションを担当された建築家香山壽夫先生<sup>1</sup>も、やはり話し合いを重視されたとおっしゃっていました。ほとんど最初の設計に沿ってリニューアルされているんですが、成功した理由は、香山先生が賛成派にも反対派にも、とことん耳を傾けたことに尽きます。これだけの建築の大家でも、合意形成にあたっては聞き役に徹し、デザインは元の設計を可能な限りそのまま残す方向で進められた。建物保存の難しさと、建築家の人間力の大切さが窺えます。

### ■官民一体化空間「霞が関コモンゲート」

私が建築賞の審査をした中で印象的なものに「霞が関コモンゲート」があります。先ほどの合意形成とはニュアンスが違うもので、官庁と民間とのコラボレートによって一体的な空間をつくり上げた大規模プロジェクトであり、PFI事業の先駆的な成功事例です。官民双方が意地の張り合いをせず実現したのですから、行政庁担当職員、協議会など関係者の方々が大変苦勞をされたのだと思います。

歴史ある旧文部省庁舎を残しつつ、新庁舎を含む超高層とのバランスがとれていて、中央広場も巧みにデザインされています。それに江戸城外堀跡の石垣が残されていることにも感動します。江戸から明治になるとき、新時代に向かっていたとはいえ、あまりにも多くの物を壊したことは非常に残念ですが、わずかでも残していただいていたよかったです。ただ、当時の指導者の方々には、昔の価値あるものをもっと残したまま近代化していったほしかったです。

ここの空間の活用が活発になれば、社会に貢献できることになりまますから、もっと話題を提供して一般の方に知ってもらい、そうすればこの成功例が次なるものを生み出すためのすばらしいインフォメーションになるのです。だから、ここはお気に入り、通るたびにいつも素晴らしいと思って眺めています。

---

<sup>1</sup> 本誌 No.207 「この人に聞く」

## ■ 建築に関する技術、文化などの継承

私の地元が群馬県なのですが、群馬は土地が豊かで不自由なく暮らせるせいか、県外に向けて自分たちのことをあまり発信しないようです。世界遺産の富岡製糸場だけでなく、様々な伝統や建築の文化、技術が伝承されてきているのに、評価・検証して県内外に伝えてこなかった。そこで、そうしたものを顕彰していこうと、建築の6団体<sup>2</sup>が「ぐんま 街・人・建築大賞」を10年前につくりました。

自薦、他薦を問わず、県民も知らなければ、もちろん県外の方も知らないけれども、せめて群馬県人が自分たち県の誇りとして、建築を再生、保護し、また新たなる建築を生み出している方々を知っていただくのが目的です。

例えば、リノベーションでは館林市の醤油老舗メーカー正田醤油さん。新しい事務所をつくる際に、古い醤油蔵の屋根付きの棟を残し、とても快適な木造の事務所にリノベーションされ、大賞を受賞されました。また、群馬県には意外にも宮大工が多数いらして、宮大工を会社組織にして若い職人を養成している方、財をかけて良質の木材を集めながら木材加工の技術者育成をされている方、お祭りの山車を修復保存されている方、左官職人の技「鏝絵」の名工、さらにお祭りの太鼓や神楽などの継承といった文化活動をされている方など幅広く表彰しています。

技術、文化、材料など、継承していかなければならないものは、たくさんあります。このような活動が各地に広がって情報交換ができ、さらにたくさんの方々に知ってもらえるようになればと思います。

## ■ 建築を守る方々へのメッセージ

私は、建物は生きていて、時間を共有していくものという感覚を持っています。近年、このままでは地球環境が確実に悪化していくと言われる中で、SDGsが特定の専門家によって取り込まれるものではなく、世界の政策になりましたが、これほど急激に普及すると思わなかった方が多いと思います。今になって思うのは、ロンドン大学の

---

<sup>2</sup> (一社)群馬建築士会、(一社)群馬県建築士事務所協会、(一社)群馬県建築構造設計事務所協会、(一社)群馬県設備設計事務所協会、(公社)日本建築家協会関東甲信越支部群馬地域会、(一社)日本建築学会関東支部群馬支所

アンソニー・アレン教授が提唱した「バーチャルウォーター」<sup>3</sup>という概念、輸入している食料、例えば牛を育てて牛肉にするのにどれだけの水を使うか。一見、自国の水資源を使っていないようで、結局他国の水資源を膨大に消費しているという事実は様々な論争を巻き起こしました。この思想は一時期消えてしまうように思われましたが、今のSDGsの中に引き継がれているわけです。やはりこうして一度世に出た思想や研究成果は消えることはないのです。

今の建築は環境に配慮されていますが、そうでない時代につくられた建築をこれからの未来に向けてどう再生させていくか。これまで私が調査してきたものや、建築賞を受けた改修事例などで既に成功している実例があります。これらを参考に、これから古くても良い建築をどう改修し、管理、保全していくのかが望まれています。SDGsという観点は今本当に外せなくなってきましたので、そういう目で様々な立場の方がそれぞれ自分の役割をしっかりと果たしていくということが大切なのだと思います。

---

<sup>3</sup> 日本のような食料輸入国において、輸入している食料を自国生産した場合、どのくらい水が必要になるかを推定したもの。食料輸入国において水資源利用について指標となる概念。